

はじめに

今年の夏は記録的猛暑、豪雨、連続台風、大型地震など、自然の驚異を思い知らされました。私たち一人一人の力は小さいかもしれませんが、日ごろの備え、情報収集、早めの行動、冷静な判断、お互いの助け合いなど、人間にしかない知恵や思いやりが、生きていくうえで大切だと思いました。



夕日と偽富士山 (レゴランドジャパン)

糖尿病と甲状腺

甲状腺は首にある蝶の形をした臓器で、代謝を調節する甲状腺ホルモンを作っています。甲状腺ホルモンが高くなると、代謝は活発になり、体重減少、頻脈、多汗などをきたします。また食べ物の吸収が良くなり、食後の血糖が上がりやすくなります。一方、甲状腺ホルモンが低くなると、代謝が落ちて体重が増えやすくなり、寒がり、皮膚乾燥、便秘などをきたします。他に思い当たることがなく血糖コントロールが変化した場合など、甲状腺機能異常が隠れていることがあるので、血液検査で甲状腺ホルモンを測定することがあります。

甲状腺の病気は自己免疫が関与していることが多く、同じく自己免疫が原因で起こる1型糖尿病の患者さんは、バセドウ病や橋本病を合併することも多いといわれています。

お知らせ

11月14日は世界糖尿病デーです。今年も当院では看板をブルーライトアップします。

(ライトアップ期間:11/12-11/18 日没~21時)

糖尿病の合併症 <腎症>

糖尿病の三大合併症の神経障害・網膜症・腎症(し・め・じ)のうち今回は腎症についてです。

腎臓は血液をろ過して尿を作る臓器ですが、体の不要物を尿中に排泄するだけでなく、水分量や血圧の調節を含めた体の恒常性の維持に重要な働きをしています。糖尿病で腎臓が傷んでくると、典型的にはまず尿に蛋白が漏れ始めます。その初期段階を調べるのが「尿アルブミン」という検査で、当院では必要な患者さんには少なくとも年1回は提出するようにしています。しかし尿蛋白が増えないまま腎機能が悪化する例も知られており、「血清クレアチニン値」や「推定糸球体ろ過量(eGFR)」が指標になります。糖尿病腎症は5段階あり(第5期が透析)、自分がどの段階にいるか主治医に確認しましょう。また糖尿病腎症の悪化を予防するには血圧管理も重要です。

糖尿病の薬の話 <インスリン>

糖尿病はインスリンの作用不足によって慢性的に血糖が高くなる病気なので、インスリンを体の外から注射で補うインスリン治療は糖尿病の基本的な治療法です。1型糖尿病などインスリンが絶対的に不足している患者さんでは必須の治療ですが、2型糖尿病でも早期にインスリン治療をすることで血糖コントロールを改善し、疲弊した膵臓を休ませてあげる効果も期待できます。

昔はウシやブタの膵臓から抽出したインスリンが使用されていましたが、大腸菌からヒトのインスリンを作ることが可能になりました。さらに遺伝子組み換えにより生理的な作用に近い人工のインスリン製剤(インスリンアナログ)が開発され、今日のインスリン治療の主流となっています。現在、混合製剤も含めて多くの種類のインスリン製剤が発売されており、多様な患者さんの病態やライフスタイルに合わせて選択の幅が増えています。歴史の古いインスリン治療ですが、今でも進歩し続けている重要な治療法です。